

島田英明著

『歴史と永遠——江戸後期の思想水脈』

(岩波書店・二〇一八年)

中田 喜万

近世後期の思想展開および幕末政治思想の研究に新たな一石を投じるのが、掲題の書である。本書によると、「名を揚げ、後世にまで語り継がれた」「朽ちゆく有限の我が身を超えて、歴史の上に永く語り継がれる存在になりたい」というのが近世の多くの知識人の夢であったそうである（これを著者は「永遠性獲得願望」と呼ぶ。本書一二頁）、その視座から徂徠学以降、幕末までの思想史に大胆かつ鋭利に切りこみ、さらに明治期への見通しを示す。大きな波紋を呼ぶことは間違いない。

序章で既存の思想史研究を批判し、次の二点で違いをうち出すという。ア、従来の研究で扱われたような、幕末の政治構想や時務策のレベルばかりでなく、「自己意識のかたち、思想と呼べるほどに論理化されていない気分や情念の機微にまで分け入らなければ、見えてこないものがある」。「激動の時代だからこそ激しく浮沈する気分の揺れ」をそのとおりに受けとめない

と、内在的理解にならない（一一頁）。イ、幕末を近代への助走期間として単純化して扱うのではなく、近世思想の文脈の様々な可能性の中で（時にはその奇態として）、理解しなければならぬ。「朱子学者」として「くくり」にしたり、「尊王論」としてレッテル貼りしたりしない。

そのような本書の緒論の前に、冒頭で吉田松陰の東北遊歴の同伴者らのエピソード（冬の夜に無茶して筑波山に登る）が紹介される。そこでの形容語は、「自意識」「ロマンティック」「奇」であり、本書全体の印象深いプロログとなっている。幕末知識人は、武士として、または儒学者として、名誉欲をたぎらせながらも満足する処遇を得られず、和漢の歴史上の人物の活躍に思いをはせ（本書でいう「歴史意識」や「歴史的想像力」はこの意味）つつ、鬱屈しデカダンスに陥っていた。その彼らの思想と行動が取り扱われる。

本書は二部構成となっている。第一部「永遠を求めて——幕末思想史への視座」は、荻生徂徠から頼山陽への思想展開をたどりながら、その中に種々の「永遠性獲得願望」を見出す。頼山陽の歴史叙述の成功を承けて、第二部「詩人・歴史・革命——志士と文士の政治思想」は、幕末思想のうち、吉田松陰、真木和泉、森田節斎をとりあげ、〈歴史を描く〉ことよりも〈歴史を作る〉ことに人々が熱狂した時代を描く。以下、大意をたどる。

第一章「古文辞学とふたつの永遠」。武家政権の下で不遇を

かこつ知識人らが、せめて自分の著作の「不朽」(典故は『春秋左氏伝』を願うことは、江戸時代にしばしば見られたが、そこに込められた意図は人それぞれであった。徂徠学派の中も分かれていた。服部南郭は、古文辞の詩作に賭けた(たとえ陳腐な定型表現の多用であつても)。古文辞がわかる人にはわかる、時空を超えた「君子」の共同体に参画することで、その著作は永遠の生命を保つと信じたからである(三八頁)。他方、古文辞の詩文に批判的になつていった太宰春台からすれば、学問は何らかの「事業」に施してこそ「不朽」となる。その主体として、旧弊を打破して春台の経世論を実行してくれる「英雄豪傑」を待望した(が、淡い期待であつた)。春台の「豪傑」論は、実質上もはや徂徠学批判であつた。

第二章「豪傑たちの春」では、その次の世代、一八世紀後半に活躍した様々な思想家に共通した「徂徠体験」の内実を明らかにする。折衷学の井上金峨らは、徂徠を含め先賢たちを一家の言にすぎないと相対化し、そういう先行学説への付和雷同を戒め、己の自得を重視した。実際は、自分らも「豪傑」の仲間入りを目指す、野心あふれる学風であつた。詩文で性霊説をとなえた山本北山も、井上金峨と同様、流行(していた徂徠学派)への追従を嫌悪した。古文辞は「奴隸」の文学で、性霊の詩こそが「豪傑」にふさわしいと。これでは古典の規範性をないがしろにした自己主張で、「不朽」どころか結局は流行りすたりに身を委ねることになると、徂徠学派から反論される。しかし

折衷学者は意に介さない。彼らの傲慢と功名心は彼らなりに徂徠学のやり方を踏襲した結果に過ぎないからである。「倨傲こそ、徂徠の開いたパンドラの箱の中身だったのである。誰もがみな、徂徠に倣つて徂徠を罵言したのだ」(八二頁)。このような野心あふれる「豪傑」志望らが新奇を追い求める競争空間の中で、国学も洋学も興つた。

同章では次いで寛政正学派による反「豪傑」論に言及される。「豪傑」気どりの新奇探求は「人倫」に害をなすからいけない。ではなぜ朱子学に回帰すべきなのか。それは単に東アジアで通用してきた事実の重みによるだけではなかつた。柴野栗山の場合、道統の伝を再確認した上、この学問が一人で勝手に作つたものではなくて長い時間を経て何人もの知性が積み上げてきた総体だからこそ支持すべきなのであつた。まさに教義としての正統の立場から、「異端曲学」を批判した。正学派の携わつた寛政改革以降、全国に学問所ネットワークが構築され、新しい知識人の存在形態が普及した。

しかし、藩校教授の待遇は低いままで、雑用に忙殺されて著述に専念できず、「不朽」願望を満たすには程遠かつた。第三章「頼山陽と歴史の時代」では、その次の世代、頼山陽が広島藩内で我慢できず、都会に飛びだし(思想・文芸の市場)で新奇を争う、その功名心を描く。彼の勝算は漢文で叙述する歴史にあった。いかなる英雄の事業も、あくまで「文士」によつて歴史に刻み込まれてはじめて、永遠に伝えられる。それだ

け「文士」の筆業には意義がある。しかも日本史を漢文の文体で述べることは当時未発達で新奇さがあつた（もう経学は古くさい）。彼は、通説に従う「史贊」と独自説を展開する「史論」とを区別して述べた。『日本外史』『日本政記』は売り上げをのばし、明治期に至る漢文脈の標準となった。

しかし幕末の政治化した状況では、そうした「文士」の生き方への魅力は失せてしまい、行動する「志士」として歴史に名を遺そうとする人々であふれかえる。ここから第二部に入る。

第四章「テロルの倫理」は吉田松陰を扱う。松陰は『孟子』を経学と史学を止揚した叡智の産物とみなしたという。『講孟余話』等から、歴史上の英雄豪傑の事実をみて感奮し、自分もまた歴史の審判で正当に評価されることを期待して政治的過激主義を望む、松陰の〈永遠性〉の夢が析出される。勿論うまくいかない。その凡庸なテロリストの、陰惨で滑稽な紆余曲折が描かれる。要するに、獄中の松陰は「不朽」に心の拠りどころを求め、おのれの生涯をひとつの作品として書き残そうという願望に駆動されていた。

その際、様々な論点が指摘される中で、特に、同時代の世俗の毀誉を顧みず後世の歴史的評価に期待するというのは、現在であれ未来であれどちらも外形的行為に対する他者からの視線であるから、同時代の毀誉が後世の毀誉にすり替わるだけではないか、むしろ独立したおのれの内なる道德律に従うべきではないか（そうすれば自ずとそこに名誉が付随するだろう）、という

議論（一八七―一八九頁）は、歴史思想の一問題として興味深い。

第五章「内乱の政治学」は真木和泉を扱う。後期水戸学の影響下で思想形成した彼の、文久・元治の政局の中での活動と思索を追う。アモルフな状況において迅速な決断と権謀術数で人の意表を突き、機先を制して有利な情勢に持ち込もうという、その兵学的リアリズムは、真木の歴史に対する態度でもあつたつまり、歴史は作り得る。そこに、倒幕を目指す革命家の大胆な信念があつた。しかし八月十八日の政変で時勢に裏切られると、松陰と同様の、歴史に期待する甘い死と永遠の論理に身を委ねて、禁門の変で敗死する。

松陰の門弟のうち、真木と運命をともにした久坂玄瑞と対極なのが、高杉晋作であつた。彼の立場からすると、できもしない正論をわめきちらして名声を貪ろうとする「功名勤王」は、「漢学馬鹿男子」である（二五一頁）。無益な権力闘争などよりも、できる範囲で富国強兵を実地に行う方が大事であつた。

第六章「文士の幕末」で扱うのは、頼山陽に師事し、梅田雲浜や頼三樹三郎らと親しく交流した森田節斎である。幕末の政治化の中で、文学にとどまる者として政治と無縁ではいられなかった。節斎は尊王攘夷のアジテーターとして活躍し、多くの勤王家（大和五条の天誅組の乱に加わった十津川郷士らを含む）を養成した。しかし節斎本人は直接行動に参加せず、あくまで「文士」として、死んだ「志士」らの活躍を英雄として史伝に書き

留め、次の「志士」らの士氣を振るわせることを業とした。

朝廷の公的事業として殉難者を顕彰してほしいという要望が、節齋に限らず、真木和泉や久坂玄瑞からも出ていた。それはやがて東京招魂社、靖国神社へと結実する。亡き「志士」らの夢をかなえるとともに、「永遠性獲得願望」という操作しやすい情念をかきたてて自発的同意を調達する統治術であった。「夢を食らう近代国家は、多くの血を吸って、いまでも九段で「英霊」たちを祀っている」(二八六頁)と、本章が情感豊かに閉じられるが、さらに本書の帰結について「しかし、それだけだろうか」と著者自ら疑問を付す。

終章では内村鑑三の講演「後世への最大遺物」を扱う。ここにも頼山陽らの思想的遺産が息づいていた。

二

難解な漢文を相手にしながらも、本書の論述は流麗でこなれた文章で、豊富な逸話が所要所におさまリ、読みやすく厭きない。まるで往年の熟達した文芸評論のようである(本の装丁もそれらしい。文芸の芸の字も「藝」にこだわる。各章の題もどこか懐かしい)。そういう手のものかと思いきや、実は社会科学の論文で、二〇一六年に東京大学大学院法学政治学研究科に提出された博士論文にもとづくという。とかく方法論のやかましい社会科学の世界で個性ある文体は評価が分かれるかもしれないが、認められるべきことであろう。入手し難い文献史料を

渉猟し豊富な先行研究を咀嚼した論述は、極めて高い学術水準にあり、著者の研鑽ぶりをうかがわせる。特に第二章から第三章にかけて、近世中期の様々な思想家を捌く手際は見事であり、この時代を課題とする研究者にとって今後の必読文献となるだろう。また専門外の読者にとっても本書の論旨は明瞭で、充実した読後感を得られるだろう。

しかしながら、長い旅路のはてに本書の結論は何かと振り返ると、いささかあやしくなる。というのも、本書全体を貫く基調は「永遠性獲得願望」であるが、それを概念として吟味する作業は最初から最後まででなされない。「本書では、なぜ知識人たちが「永遠」を夢見るに至ったのかという理由は問わない」(二三頁)、「本書では、「永遠」とは何か、「無窮」など類義語との相違は何か、それは *eternity* なのか *immortality* なのか、といった哲学的考察に深入りし、日本思想における歴史観や時間意識の特質を探るといったことも企図しない」(三〇一頁、注(30))とことわって、初めから放棄してしまっている。しかし、そこを理論的に詰めておかないと、本書全体の構成は曖昧となり、個別の美しい話題の詰め合わせになってしまふ。個々人の伝記を超えた思想史には、分析する道具を磨く哲学的考察がやはり欠かせない。

いつの時代のどこの人であれ、自分が苦勞して成し遂げた仕事が永久に遺ればうれしいうだろう。創作表現に携わる人ならば特にそういう思いが強いだろう。その人類普通の感情を超えて、

本書で扱われた時代に「永遠性獲得願望」が存在したとすれば、それはいかにこの時代特有のものなのか、あるいは強弱の問題だとすれば、どうしてこの時代で特に強くなったのか、その問いに答えない限り本書の結論にならないし、『歴史と永遠』という本書の題目が浮いてしまう。

永遠性の追求は往々にして神仏への信仰を通して説かれてきた。本書の登場人物らは宗教に頼らず（終章の内村鑑三は例外）、それと異なる方途（詩文や歴史）を選んだという。それはなぜか。本書の課題に付随する問いのほうである。出発点にした徂徠学でいえば、おそらく「天」との関係を突き詰める必要がありそうであるが、本書では示唆されるにとどまる。「歴史意識」という時も、彼らの歴史観や時間意識の問題を抜きにして、歴史に自分の名を遺す願望というだけで済むのか、疑問がぬぐえない。かろうじて、世の〈開け〉の感覚のこと（六二頁、八六頁、九四頁、「勢」をめぐって今が変動期であるという歴史認識（二二〇―二二五頁）、および古代王政観と「封建・郡県」（二二八―二三一頁）が考慮に入る。

功名心についていえば、戦国の世であつたら武功を追い求めた。近代国家の制度が確立してくると学歴を通した立身出世主義が幅をきかす。この前後に挟まれた時代は、前後といかに異なる社会なのか。あるいは「家」を単位とする社会にもかかわらず、本書の登場人物らは、概して家名の維持向上よりも自分一個人の名声を欲したようであるが、それはなぜか（頼山陽の

事例は一一四頁で言及される）。この辺りの背景の説明も、本書の時代を画定させるために必要な作業である。商業出版の競争空間の弊害は理解しやすい。それは、市井はともあれ、武士をどれだけ巻き込むのだろう。また「文士」の功名として、明治期の徳富蘇峰なども容易に連想されるが、どこまで関わるのだろうか。

実はそんな議論の枠組を設定しなくても、第一部、徂徠から頼山陽までを主としてみれば、徂徠学派の定冠詞付きの「不朽」願望とその後の思想的展開として論じること成功している。傍目にみると、そこにふみとどまって議論を深める余地もあるように思われるが、第一部の副題に「幕末思想史への視座」と付けて第二部へ行論を急いでしまう。第二部各章は叙述の様相が一変し、吉田松陰ら主人公の個性が際立って、「永遠性」のどこまでが思想的影響で、どこからが思想家の人格、氣質の属人的問題か、段々と不明になっていく。文人の「不朽」願望と靖国合祀の永遠性とは連続するのだろうか。水戸学を交えて、もう少し補助線を引きたい。

もし幕末思想史を主とすれば、今日において勤王史観や薩長中心史観をなぞっては、いたく懐古趣味になってしまふ。第二部で過激な勤王論者ばかりが選び出されて、政治的に偏っているのが気にかかる。自己顕示欲が強いと過激になりやすいのだろうか。それは頼山陽の影響力を示すという意味でも誤解を招く取り合わせではないか。また例えば横井小楠には僅かな言及

にとどまるが、彼の自意識は視野に入らないのだろうか。そもそも功名にはやる人ばかりだっただろうか。西郷隆盛ばりに、「名もいらず、官位も金もいらぬ人」は、本書の観点からどのように位置づけられるのか。

本書が、文字面の理屈にとらわれず、思想家らの気分や情念の次元から深く思想を理解しようとするのは、尤もである。ただ、動機づけからの解明に力点が置かれ、しばしば青年期の著述や逸話に注目する。青雲の志に着目するのも一法であろうが、それでは思想家が生涯でいかなる知的達成を遂げたのか、いかなる将来構想をうち立てたか、ということに目が届きにくくなる。小楠も埒外になってしまう。その点、本書とは異なる思想史の方法も必要であろう。

以上、縷々注文をつけてしまったが、本書の研究の密度の濃さは圧倒的で、非常に参考になる。一読者として公刊を喜びたい。

(学習院大学教授)

川村邦光著

『出口なお・王仁三郎』

——世界を水晶の世に致すぞよ——

(ミネルヴァ書房・二〇一七年)

福家 崇洋

本書は、宗教法人大本の開祖出口なおと聖師出口王仁三郎の評伝である。

先行研究として思いあたるのは、安丸良夫の『出口なお』（一九七七年）であり、村上重良の『評伝 出口王仁三郎』（一九七八年）などである。大本の研究に触れた人間なら誰でもわかるが、なおのお筆先や王仁三郎の『靈界物語』など読むべき一次資料は膨大にあり、どちらか一方を論じるだけでも容易ではない。にもかかわらず、大本本部から提供された写真等の貴重資料を駆使して、基礎資料の水準を大幅に引き上げながら、しかも二人まとめて論じるという偉業が達成されている。その意味で、私の読後感には、新刊にして古典というものであった。

こうしたことが本書で可能になったのは、著者が宗教学や民俗学の分野で大本を論じてきたことが大きい。一九八〇年から近年まで、出口なおや王仁三郎、昭和神聖会などが分析されてきた（参考文献）。したがって、本書は書き下ろしの体裁をとりながら、重厚な研究成果に裏打ちされた叙述となっており、